書き抜き読書ノート 425　　2009 年 11 月 27 日

湯浅赳男著「新版　ユダヤ民族経済史－イスラームと西ヨーロッパとの狭間で－」

洋泉社 2008 年 9 月 22 日刊を読む

ユダヤ民族の歴史への新しいアプローチ

１．理論的な説明はさておき、人類はいくつかの民族に分かれており、人間はその中の一人(普通であれば、国民)として生きているのであるが、誰しも自らの民族の繁栄、隆盛を願わぬ者はいない(自分の民族の悪口を言うことが知識人のあかしであると考えている日本人は無視する)。そして、この気持ちに気合いを入れるために「歴史」が作られるのである。それは自らが優れている一方、他者が劣っていることを主張するものである。かくて、どの民族も例外なしに悪口に取囲まれることになるのであるが、その中で飛抜けていたのがユダヤ人である。

２．民族が周辺による加害から自らを守るための手段で今のところ最も有効なものは国家であろう。ユダヤ人はこれを失ってから 2000 年、自らを維持しながら、20 世紀、ナチスによる数百万人の大虐殺が、反ユダヤ主義を共有している欧米人を一瞬ひるませている隙に彼らの国家をパレスティナに建設してしまった。これが人類を自爆させかねない危険な火種になっていることは言うまでもないが、このことについては別に議論すべきことである。今さら言うまでもなく、国という庇護のないところで、しかも客人民族という部屋借りの立場で、2000 年にわたり民族を維持することを可能にしたものは信仰である。世界を創造した神に選ばれ、いつか必ず救世主(メシア)が現われて救済してくれるという約束を交わした神への信仰である。

３．彼らにとって、祈りとはこの契約の確認であり、契約にしたがって、救済の日を待ち、そして待ってきたのである。しかしながら、祈るためには生きていなければならない。生きるためには万全の工夫と努力をしなければならない。そのために約束の土地を獲得する努力をしなければならない。この第一目標は首都イェルサレムに祈りの場、神殿を持つ国を建設することによって実現された。しかし、外敵によって国は征服され、従属させられる。のみならず、国の主権の回復のための戦いには敗れ、ユダヤ人は国を失って離散しなければならなかったのである。しかし、彼らは彼らを選んで契約の相手とした神への信仰を失わなかったのである。そしてその信仰を守るためには生きなければならない。生きるためには、離散した彼らは外来の客人なのであるから、彼らに部屋を貸してくれる主人に適応しなければならない。2000 年近い彼らの離散の歴史は言わば居住を許す国を探し、そこで生計を立てる努力をする歴史であった。

P11 ～ 12

[コメント]

一つ一つの民族には歴史がある。多様な集団で交流することを能力というのなら、自分が接する人々が所属する民族の歴史を素直な心で学ばなければならない。では、ユダヤ民族にはどのような歴史があるのであろうか。ユダヤ民族問題の根本的解決に向けての手がかりを本書で探りたい。

－ 2009 年 11 月 27 日　林明夫記－